

# 『金剛頂瑜伽他化自在天理趣会普賢修行念誦儀軌』

## における四摂の印言について

布施 浄明

はじめに

『金剛頂瑜伽他化自在天理趣会普賢修行念誦儀軌』（正蔵20 No.1120. 523. C）は、宗祖大師、円仁、円珍請来の儀軌で、金剛薩埵儀軌類に属す念誦法であり、理趣経法の一つである。他化自在天において金剛界毘盧遮那が理趣会の内十七尊についての念誦法を説いたものである。行法の目的は、行者が身口意の三密行を修し、内にある煩惱を摧破し、浄菩提心をあらわにすることにより金剛薩埵の因位であり、次に、五相成身觀を修し、本尊と合一した時、金剛薩埵の果位となり、普賢金剛薩埵即ち智身毘盧遮那の色身を獲得するのである。

その次第の中に、「四摂印言」があるが、この「四摂印言」は広沢方で多く稱され、小野方では「四明」と稱されている。「四明」「四摂」と名付ける由縁は、「密教大辞典」に「四明となづくるは真言による。真言四首なるが故なり。四摂と稱するはその功能に由る、本尊を摂して己身に入るが故なり」と解説している。またその目的は修法中すでに召請した本尊と冥会一体となるために結誦するものであり、どの修法の中にも組み込まれてい

る。このように、どの部分を強調するかにより、呼称が異なることは仕方がないところである。但し本論では、本軌にならって「四摂」と記すことにする。

本論は日本における四摂印言を考察するもので、インド・中国の文献は参照せずに考察を進めていきたい。そして、「金剛頂瑜伽他化自在天理趣会普賢修行念誦儀軌」中に説かれる四摂について、「大楽金剛薩埵修行成就儀軌」・「金剛頂勝初瑜伽經中略出大楽金剛薩埵念誦儀軌」・「金剛頂勝初瑜伽普賢菩薩念誦法」・「普賢金剛薩埵略瑜伽念誦儀軌」・「金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌」・「大楽金剛不空真実三昧耶經般若波羅蜜多理趣釈」・「般若波羅蜜多理趣經大楽不空三昧真実金剛薩埵菩薩等十七聖大曼荼羅義述」一卷等といった他の金剛薩埵儀軌類と異質であることからその内容を考察したいと思う。

### 第一章 「理趣經法」における四摂

「理趣經法」なる修法を見るに福田亮成師著の「理趣經の研究」を参照させていただくと、その中に「理趣經法」という場合、その本軌を尋ねるに、普通、不空訳「理趣經」一卷、「理趣釈」二卷、「理趣經十七尊義述」一卷、「理趣会軌」一卷、「大楽軌」一卷、「五秘密軌」一卷等を掲げる。理趣經法の本軌は、「理趣經」、「理趣釈」及び、「金剛薩埵儀軌」と総称される儀軌類である」と述べ、さらにその祖型について「理趣經法の祖型を尋ねれば、前述の如く、それは勝初瑜伽なる名称を有する諸儀軌の修法次第ということになる。しかし、本来それらは、理趣經法に、修法の具体的素材を提供したのであって、理趣經法そのものであったわけではない。それよりは勝初瑜伽なる修法体系そのものであったのである。しかし、その勝初瑜伽が持っていた五秘密思想は「理趣經」解釈に積極的な働きをした時点で、そこに理趣經法が出現したことになるわけである」と学説されている。つまり、

理趣経法や五秘密法は『理趣経』や『勝初瑜伽経』を中心とした、儀軌類から構成されており、その次第は『勝初瑜伽経』によるものであるとされる。幸心流では「理趣経法」は『薄双紙』諸経部に収められており、滅罪、敬愛法として修される。

通常幸心流の次第に出す四摂（四明）は、『五秘密軌』所説の「鉤・索・鎖・鈴」の四菩薩の徳を表し、その四徳は、布施・愛語・利行・同事にあたる。この四菩薩が大悲利他の行願により四徳を駆使し衆生を悟りに導く法である。『十八道念誦次第』に、請車輅↓召請↓四明の順で本尊を壇上にお迎えし、『密教事相大系』に「浄土よりお迎えする本尊は報身佛である。壇上に安置し奉る絵木等の本尊は応身佛である。しかし、道場観に観想し奉る本尊は行者自身の法身佛である。今この三身一体ならしめんが為に四明の印言を結誦するのである」と解説されているように、三身佛と合一するための修法で、「召し、引し、縛し、喜せしむ」と観念し、佛と堅固になることを修するのである。『五秘密軌』に、

「即ち四字真言を誦す。

ジャク ウン バン コク

この真言を誦するに由るが故に、金剛薩埵の智身を召せしめ、入れしめ、縛せしめ、喜ばしめ、瑜伽者の定身と交わり合わせて一体なり」（正蔵20, 537, A）

と説くが如くである。以下、四摂について説く儀軌類の当概箇所を一覧にして紹介する。

先ず四菩薩の印真言について述べれば、

①『金剛頂一切如来真実撰大乘現證大教王教』に、四摂菩薩の出生する第一金剛鉤菩薩は、

「その時、世尊毘盧遮那如来は、復た一切如来の三昧耶鉤三昧耶より生ずる薩埵金剛と名づくる三摩地に入

りたまい。一切如来の一切印衆主を自心より出したもう。

バザラ クシャ」(正蔵18. 215. B)

#### 第二金剛索菩薩は、

「その時、世尊は復た一切如来三昧耶の引入摩訶薩埵三昧耶より生ぜられる金剛と名づくる三摩地に入りたまひ、一切如来印入承旨を自心より出したもう。

バザラ ハシャ」(正蔵18. 215. C)

#### 第三金剛鎖菩薩は、

「その時、世尊は復た、一切如来の三昧耶の鎖大薩埵の三昧耶より生ぜられる金剛と名づくる三摩地に入りたまひ、一切如来使を、自心より出したもう。

バザラ ソホタ」(正蔵18. 215. C)

#### 第四金剛鈴菩薩は、

「その時世尊は、復た一切如来遍入大菩薩の三昧耶より生ぜられる金剛と名づく三摩地に入りたまひ、一切如来の一切印僮僕を自心より出したもう。

バザラ ベイシヤ」(正蔵18. 215. C216. A)

と説かれる。四摂菩薩は「東方阿閼如来の四佛によって毘盧遮那如来に供養された香・華・燈・塗の外の四供養女を管理護衛する門衛達で、毘盧遮那如来の心臓より出て、東南西北の四門を守り、曼荼羅と外界との交流を管理する」(曼荼羅図典)という特性から、行者が召請した本尊と堅く合一する為にこの四摂菩薩の徳によって成就されるのである。この四菩薩の真言にそれぞれ「ジャク・ウン・バン・コク」の種子を付ければ四摂の印言に

なる。但し幸心流の場合は四摂菩薩の印言をのぞきただ種子のみを結誦するのである。

次に「理趣経法」ではどうであるのか、

②『金剛頂瑜伽他化自在天理趣會普賢修行念誦儀軌』の四摂を見ると次のように説かれている。

「便ち色を以て聖者を召し殿の内の智身に入れよ。三世の印を以て進を召して鉤の如くするなり。真言に曰く。

オン バザラ ロヘイ ジャク

召き已て又声を用いて智を導入して同一にせよ。進・力を以て相いささえ索の如くする是れなり。真言に曰く。

オン バザラ セフデイ ウン

同一密合し已て復た香を以て止住せよ。進力度を以て鉤結して連鎖の如くする是れなり。真言に曰く。

オン バザラ ゲンデイ バン

固縛し已らば又味を用いて悦喜せしめよ。進力を以て面相い合する是れなり。真言に曰く。

オン バザラ ラセイ コク

應に語言を以て歌詠を為すべし」(正藏20. 526. C-527. A)

この時点では、『金剛頂一切如来真实撰大乘現證大教王教』の四摂菩薩の真言と『金剛頂瑜伽他化自在天理趣會普賢修行念誦儀軌』に説かれる四摂とは別の見解を示している。

そこで、『金剛頂瑜伽他化自在天理趣會普賢修行念誦儀軌』以外の理趣経法の四摂部分を見ると次の如くである。

③『大楽金剛薩埵修行成就儀軌』の中で説かれる四摂は、

「二拳の小指を以て相い鉤し、腕を交え、直く二頭指を豎つ。乃ち微く右の頭指を屈し、用いてこれを招くを鉤と為す。真言に曰く。

バザラ クセイ ジャク

また此の鉤印に准じて、二頭指を相いささえて索の如きにせよ。真言に曰く。

バザラ ハセイ ウン

また即ち此の索印の二頭指を改め、これを交え結び、手の背を開きて鎖と成せ。真言に曰く。

バザラ シャウギャレイ バン

また即ち前の鎖印の二手の背を相いせまり、上下にこれを揺るがして磬と為せ。真言に曰く。

バザラ ケンデイ コク」(正蔵20. 510. C-511. A)

と説かれる。

また次に、④『金剛頂勝初瑜伽經中略出大樂金剛薩埵念誦儀軌』の中で説かれる四摂は、

「復次に今当に設ぬべし。二拳の背應にせばむべし。檀・慧反して相い鉤し、進・力皆極めて舒べよ。又稍進度を屈して、微しく招いて是れ鉤の契なり。その明後の如く称せよ。

バザラ クセイ ジャク

前の印の進・力を交え、反て頭を以て相ささえ、その中還索の如くして、後の真言を称誦せよ。

バザラ ハセイ ウン

進・力を改めて相い鉤して、拳を開いて背けて臂を交えよ。遂に鎖の契成ずと名づく。密言は是の如く称せよ。

バザラ ショウギャレイ バン

鎖の如くして背か相い著けて、動揺せよ。磬なり。明に曰く

バザラ ケンダイ コク」(正蔵20. 516B-C)

と説かれている。

次に、⑤『金剛頂勝初瑜伽普賢菩薩念誦法』（正藏20. 530. A）は前の『金剛頂勝初瑜伽經中略出大樂金剛薩埵念誦儀軌』と同文である。

次に、⑥『普賢金剛薩埵略瑜伽念誦儀軌』には、

「次いで鈎印を結べ。二手金剛拳にして二小指反して相鈎け、左頭指を直く堅て、右頭指を屈して上下に来去す。是れ鈎印なり。密語に曰く。

オン バジロクセイ ジャク

次に、前の印を解かず、二頭指の頭を改めて相ささえ、環の如くす。是れ索印なり。密語に曰く。

オン バザラ ハセイ ウン

次に、前印を以て二頭指二大指、互いに相交え、頭を相捻じて其の臂を屈す。是れ鎖印なり。密語に曰く。

オン バザラ ショウギャレイ バン

次に、如前の鎖印を二大指は掌に入れ、揺動して即ち成る。密語に曰く。

オン バザラ ゲンタイ コク」（正藏20. 533. A,B）

と説かれている。

次に、⑦『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』

「即ち四字真言を誦す。

ジャク ウン バン コク

この真言を誦するに由るが故に、金剛薩埵の智身を召せしめ、入れしめ、縛せしめ、喜ばしめ、瑜伽者の定

身と交わり合わせて一体なり」(正藏20.537.A)

等と説かれている。それぞれの儀軌に出す四摂の真言は、若干の読み方は違うが、同一のものである。即ち、「クセイ」は「鉤召」を、「ハセイ」は「素」を、「シャウギヤレイ」は「鎖」を、「ケンデイ」は「鈴」をそれぞれ意味している。以上挙げた儀軌類は同一であるといえる。但し⑦『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』のみ種子を用いている。従って、「理趣経法」の内②『金剛頂瑜伽化自在天理趣会普賢修行念誦儀軌』は、③『大乗金剛薩埵修行成就儀軌』・④『金剛頂勝初瑜伽経中略出大乗金剛薩埵念誦儀軌』・⑤『金剛頂勝初瑜伽普賢菩薩念誦法』・⑥『普賢金剛薩埵略瑜伽念誦儀軌』・⑦『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』に見られる四摂の部分とは異質なものであることが推察される。

## 第二章 『金剛頂瑜伽化自在天理趣会普賢修行念誦儀軌』の四摂について

では何故『金剛頂瑜伽化自在天理趣会普賢修行念誦儀軌』だけ他の儀軌とは違った真言を説いているのであろうか。『金剛頂瑜伽化自在天理趣会普賢修行念誦儀軌』には四摂について次の如く説かれている。

「便ち色を以て聖者を召し心殿の内の智身に入れよ。降三世の印を以て進を召して鉤の如くするなり。真言に曰く。

オン バザラ ロヘイ ジャク

召き已て又声を用いて智を導入して同一にせよ。進・力を以て相いささえ索の如くする是れなり。真言に曰く。

オン バザラ セフデイ ウン

同一密合し已て復た香を以て止住せよ。進力度を以て鉤結して連鎖の如くする是れなり。真言に曰く。



オン バザラ ゲンデイ バン

固縛し已らば又味を用いて悦喜せしめよ。進力を以て面相い合する是れなり。真言に曰く。

オン バザラ ラセイ コク

應に語言を以て架詠を為すべし」(正蔵20.526. C-527. A)

とある。明らかに他の儀軌と相違しているのは、次の表の如くである。

②～⑥の儀軌『金剛頂瑜伽他化自在天理趣會普賢修行念誦儀軌』

- |    |                |      |    |      |     |
|----|----------------|------|----|------|-----|
| a. | クセイ(アングシャ)     | (鈎召) | —— | ロヘイ  | (色) |
| b. | ハセイ(パーシャ)      | (索)  | —— | セフデイ | (声) |
| c. | シャウギャレイ(シャウガラ) | (鎖)  | —— | ゲンデイ | (香) |
| d. | ケンデイ(ガンター)     | (鈴)  | —— | ラセイ  | (味) |

『金剛頂瑜伽他化自在天理趣會普賢修行念誦儀軌』では何故色・声・香・味の四波羅蜜の真言を加えているのだろうか。そこで、その典拠を見出すに、先ず始に『大乗金剛不空真実三昧耶経般若波羅蜜多理趣釈』(以下「理趣釈」)初段に出る「十七清浄句」を真言に配当する部分を見ると、

「オン字とは欲金剛法智印の明なり、カ字とは金剛悦喜法智印の明なり、ソ字とは愛金剛法智印の明なり、クア字とは慢金剛法智印の明なり、バ字とは意生金剛法智印の明なり、ザラ字とは金剛髻離吉羅法智印の明なり、サ字とは愛金剛法智印の明なり、タバ字とは金剛傲法智印の明なり、ジャク字とは春金剛法智印の明なり、ウン字とは雲金剛法智印の明なり、バン字とは秋金剛法智印の明なり、コク字とは冬金剛法智印の明なり、ソ字とは色金剛法智印の明なり、ラ字とは声金剛法智印の明なり、タ字とは香金剛法智印の明なり、

サトバ字とは味金剛法智印の明なり、此の密言十七をば則ち十七菩薩の種子と為し云々」(正藏 9. 609. C)と説かれており、十七清淨句を十七尊に配当し、十七尊にそれぞれ十七字真言を配当している。特に「ジャク・ウン・バン・コク」の四摂部分はそれぞれ「春・雲・秋・冬」の四菩薩に配当されている。また次に「ソ・ラ・タ・サトバン」の四字には「色・声・香・味」の四菩薩を配当されている。従つて、『金剛頂瑜伽他化自在天理趣會普賢修行念誦儀軌』の四摂は「理趣釈」によるものではないことが推察され、『理趣釈』では、四摂を「春・雲・秋・冬」としている。

次に『般若波羅蜜多理趣經大樂不空三昧真実金剛薩埵菩薩等十七聖大曼荼羅義述』一卷には、

「其の十四は謂ゆる金剛色菩薩なり。色清淨智を以て淨妙界に於いて受用色身を起し、雜染界に於いて變化色身を起し、しかも摂來の事を為す。故に鉤を持するを以て契と為す。

其の十五は謂ゆる金剛声菩薩なり。声清淨智を以て能く六十四種の梵音の法界に普周して引入の事を為すことを表す。故に索を持するを以て契と為す。

其の十六は謂ゆる金剛香菩薩なり。香清淨智を以て金剛界自然名称の香を發し、一切の散動心に入りて以て止留の事を為す。故に鎖を持するを以て契と為す。

其の十七は謂ゆる金剛味菩薩なり。味清淨智を以て瑜伽三摩地の無上法味を持するを以て歡樂の事と為す。故に鈴を持するを契と為す。」(正藏 19. 618. A)

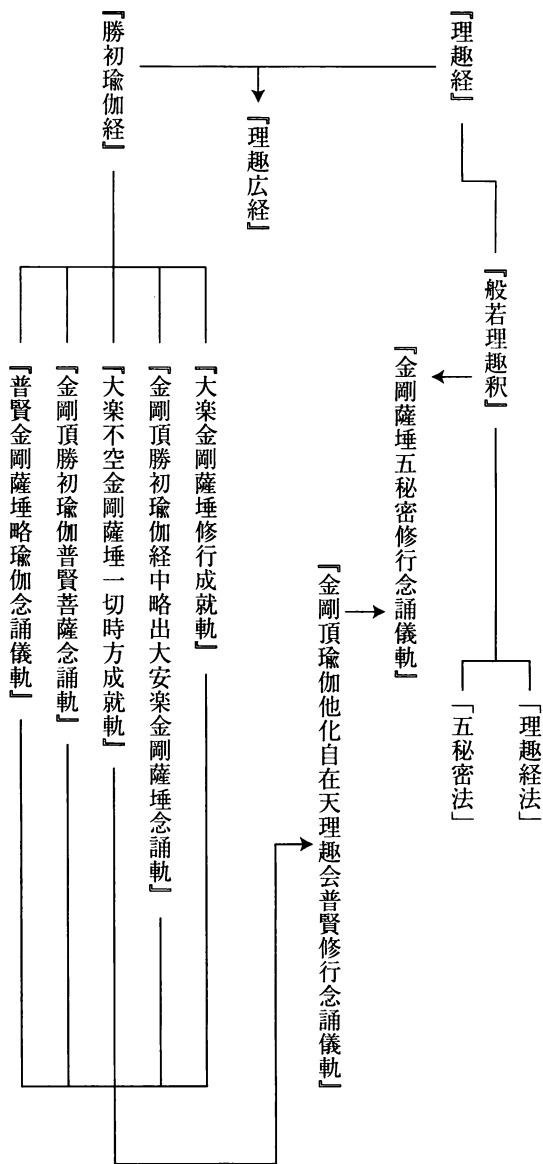
とあり、『般若波羅蜜多理趣經大樂不空三昧真実金剛薩埵菩薩等十七聖大曼荼羅義述』一卷では四摂について、それぞれ「色・声・香・味」の四波羅蜜を配当し、しかもその四波羅蜜の持物が「鉤・索・鎖・鈴」であること明かしてある。従つて『般若波羅蜜多理趣經大樂不空三昧真実金剛薩埵菩薩等十七聖大曼荼羅義述』一卷と『金

剛頂瑜伽他化自在天理趣會普賢修行念誦儀軌」は類似点を見出す事が出来る。通常四波羅蜜とは、「金・宝・法・羯」である。しかし、四摂は布施・愛語・利行・同事であり、特に「理趣經法」は理趣會曼荼羅を本尊とすることから、慾（東）・触（南）・愛（西）・慢（北）の四金剛菩薩が金剛薩埵より出生し、直ちに四摂菩薩「鉤（東）・索（南）・鎖（西）・鈴（北）」が呼応する形で行者の自心に現出する。『般若波羅蜜多理趣經大樂不空三昧真実金剛薩埵等十七聖大曼荼羅義述』一卷では「色・声・香・味」の四波羅蜜を用いている。従って『金剛頂瑜伽他化自在天理趣會普賢修行念誦儀軌』は多分に『般若波羅蜜多理趣經大樂不空三昧真実金剛薩埵等十七聖大曼荼羅義述』一卷の影響を受けていることが推察される。また、金剛界曼荼羅理趣會には門衛として、色（東）、声（南）、香（西）、味（北）に画かれていることから、四摂の真言に四波羅蜜の真言を加えたものを『金剛頂瑜伽他化自在天理趣會普賢修行念誦儀軌』では用いているのではないだろうか。

さらに、この『般若波羅蜜多理趣經大樂不空三昧真実金剛薩埵等十七聖大曼荼羅義述』一卷の卷末に、「是の如く等の大菩薩十七清淨の三摩地智は、文に依て広述すれば無量の名義、体用、理事の成証の門有り。今但し粗にして綱目を挙ぐるのみ。

金剛頂經第十三會の大三昧耶真実瑜伽を出して、大意を略抄す。」（正藏29, 618 B）と説き、『金剛頂經第十三會』で説く所を略述したものであることから、『初会金剛頂經』↓『金剛頂瑜伽他化自在天理趣會普賢修行念誦儀軌』という図式となる。従って『金剛頂瑜伽他化自在天理趣會普賢修行念誦儀軌』の四摂の部分は『初会金剛頂經』であることが推察されるのである。

福田亮成師著『理趣經の研究』に、『理趣經』と『勝初瑜伽經』の關係を次の表に示している。



「問題点(11) No. 1122は、同じく「十七尊」を内容とするが、名称等に特色を示す。前儀軌に共通せざる真言・印等が見える」

と述べている。この表からも解るように、『大楽金剛薩埵修行成就軌』・『金剛頂勝初瑜伽経中略出大安楽金剛薩埵念誦軌』・『大楽不空金剛薩埵一切時方成就軌』・『金剛頂勝初瑜伽普賢菩薩念誦軌』・『普賢金剛薩埵略瑜伽念誦儀軌』なる儀軌は、『勝初瑜伽経』の系列にぞくするもので、そこから『金剛頂瑜伽他化自在天理趣会

普賢修行念誦儀軌』に流れていることが確認されている。従って、『金剛頂瑜伽他化自在天理趣會普賢修行念誦儀軌』に見られる四摂の真言は、前の五儀軌をふまえながらも、独自の構成を為していることが認められるのである。

#### まとめ

「理趣経法」は、幸心流では秘法とされており、『密教事相大系』には「白寶口抄」第46卷（正藏図6.246）に依れば、醍醐で清瀧権現實前に於いてこの法を修す白月十五日は金剛界立、黒月十五日は胎藏界立、また八祖御影供の時龍猛・龍智・金剛智・不空は胎藏界立、善無畏、一行、恵果、弘法は金剛界立にこれを修すと伝え、高野山に在りては干支に依りて甲胎乙金、甲の時は胎藏界、乙の時は金剛界に依りて修法し、1・3・5・7・9・11の奇数六ヶ月は胎藏界、2・4・6・8・10・12の偶数六ヶ月は金剛界で修すことになっているようである。わが智山に在りても同様であるが、その金剛界の時は不動法を修し、胎藏界の時は理趣法を修すことは相伝の口訣である」と。しかし、今日ではこの理趣法は修されていないのが現状である。しかし、

今回は「理趣経法」そのものの研究ではないために、本尊の問題や曼荼羅の問題についてはふれませんでした。その結果、「理趣経法」の典拠である儀軌類の比較により、以下のことが確認された。『金剛頂瑜伽他化自在天理趣會普賢修行念誦儀軌』は他の「理趣経法」所説の儀軌に比べると四摂の真言からも別系統のものであり、それは『金剛頂経』に付する『般若波羅蜜多理趣経大楽不空三昧真実金剛薩埵菩薩等十七聖大曼荼羅義述』一卷によるもので、十七清浄句に配当される四摂菩薩の種子「ジャク・ウン・バン・コク」は「色・声・香・味」という四金剛女にあたり、

その菩薩がそれぞれ「鉤・索・鎖・鈴」の持していることから、『金剛頂瑜伽他化自在天理趣会普賢修行念誦儀軌』における四摂の真言は「色・声・香・味」の真言にそれぞれ「ジャク・ウン・バン・コク」を付けたというものである。金剛界曼荼羅理趣会には、色（東）、声（南）、香（西）、味（北）であり、四摂菩薩（鉤・索・鎖・鈴）は四波羅蜜女（色・声・香・味）は四金剛女であり、この四金剛女と金剛薩埵を併せて五秘密の三摩地をしめしているのである。

四攝菩薩真言 配当場薩対照表

	四攝菩薩	金剛鉤菩薩	金剛索菩薩	金剛鎖菩薩	金剛鈴菩薩
経軌No.	種子	ジャク	ウン	バン	コク
No.865	真言	バザラ クシャ	バザラ ハシャ	バザラ ソホタ	バザラ ベイシャ
No.1119	真言	バザラ クセイ ジャク	バザラ ハセイ ウン	バザラ シャウギヤレイ バン	バザラ ケンデイ コク
No.1003	配当菩薩	春金剛	雲金剛	秋金剛	冬金剛
No.1122	真言	オン バザラ ロヘイ ジャク	オン バザラ セフデイ ウン	オン バザラ ゲンデイ バン	オン バザラ ラセイ コク
No.1122		色金剛	声金剛	香金剛	味金剛
No.1004	配当菩薩	色金剛	声金剛	香金剛	味金剛